

学びを生かし、生活をよりよくしようと工夫する児童の育成

—家庭科学習指導における「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」の設定と「ポートフォリオ」の導入を通して—

前橋市立荒牧小学校 室岡 みずき

本研究は、小学校家庭科において「学びを生かし、生活をよりよくしようと工夫する児童の育成」を目指すものである。研究の有効性を明らかにするため、第5学年及び第6学年において授業実践を行い、その結果を検証した。本研究における手立ては、以下に示すとおりである。

- ① 児童が知識及び技能を繰り返し活用し、課題を解決する学習を家庭につなぐため、一連の学習過程に「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」を位置付けて題材を構成し、指導を工夫した。
- ② 児童が家族の一員として生活の営みに協力しようとする意欲を高めるため、一連の学習過程を通して「ポートフォリオ」を導入し、家庭との連携を図った。

I 主題設定の理由

現在、人工知能（AI）が人間の知能を超えるとされるような情報技術の発展に加え、グローバル化の進展によって社会の多様化が急速に進んでいる。それに伴い、子供を取り巻く環境は豊かで便利な生活へと変化し、生活上の諸問題に積極的に関わらなくても不自由のない生活を送ることができている。中央教育審議会の答申では、「家庭や地域の教育機能の低下等も指摘される中、家族の一員として協力することへの関心が低いこと、家族や地域の人々と関わること、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないことなどに課題が見られる。」と述べられている。生活そのものを学びの対象としている家庭科では、持続可能なよりよい生活をつくろうと主体的に対応することができる児童の育成が求められるのである。

次期小学校学習指導要領（平成29年告示）解説家庭科編では、家庭科の目標に「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成すること」が示されている。これは、児童が生活事象を「協力・協働、健康・快適・

全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等」の視点で捉え、実践的・体験的な活動を通して、習得した知識及び技能を活用し、身近な生活の課題を解決したり、家庭や地域で実践したりできるようにすることを目指すものである。そこで、家庭科においては、実生活との関連を図った問題解決的な学習を効果的に取り入れることで、児童が生活をよりよくすることの大切さに気付き、実践することができるように指導していくことが重要であると考えられる。

県の「平成30年度学校教育の指針」では、家庭・家庭分野の指導の重点として、「生活の中から課題を設定し、家庭・地域で実践する活動を題材の指導計画に位置付けること」を挙げている。また、本市の家庭科、技術・家庭科における「平成30年度各教科等指導の努力点」では、「実践的・体験的な学習の活動を通して基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得することや、それを身近な生活において積極的に活用できるようにすること」を挙げている。

本研究を進めるに当たり、家庭科学習の現状を把握するため、協力校第5学年及び第6学年の児童184名を対象に実態調査アンケートを行った。その結果、家庭科の学習が「好

き」と答えた児童は92%、家庭科の学習は将来においても「役に立つ」と答えた児童は94%であった。一方で、家で決められた仕事を「よくしている」と答えた児童は37%であった。これらのことから、家庭科の学習への関心や有用感が高いにも関わらず、学習したことを生かして家庭生活で実践することが十分ではない児童の実態が明らかとなった。それに伴い、学習したことを生かして、家庭生活で実践できる児童を育成するための指導が十分ではないという課題を見いだすことができた。

これらの国、県、本市の方針及び家庭科学習の現状を踏まえ、児童が学習したことを生かし、実践することができるようにするために①指導の工夫と②家庭との連携に視点を当てた手立てを講じていくことが有効であろうと考えた。そこで、本研究においては、児童が習得した知識及び技能を実生活に生かし、家庭で実践できるようにするための「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」の設定(①)と、児童が家族の一員として、生活の営みに協力しようとする意欲を高めるための「ポートフォリオ」の導入(②)を具体的な手立てとした。

以上のことから、家庭科学習指導において「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」を設定し、「ポートフォリオ」を導入することで、学びを生かし、生活をよりよくしようと工夫する児童を育成することができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

学びを生かし、生活をよりよくしようと工夫する児童を育成するために、「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」の設定と「ポートフォリオ」の導入が有効であることを授業実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

家庭科学習指導において、以下の2つの手立てを講じることで、学びを生かし、生活をよりよくしようと工夫する児童を育成することができるであろう。

【手立て①】

「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」の設定

実生活との関連を図った問題解決的な学習を通して、習得した知識及び技能を繰り返し活用し、課題を解決する学習を家庭につなぐため、一連の学習過程に「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」を位置付けて題材を構成し、指導を工夫する。

【手立て②】

「ポートフォリオ」の導入

家族の一員として生活の営みに協力しようとする意欲を高めるため、一連の学習過程を通して「ポートフォリオ」を導入し、家庭との連携を図る。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「学びを生かし」について

本研究においては、日常生活に必要な知識及び技能を習得することのみを目的とするのではなく、習得した知識及び技能を児童がいかに実生活の中で活用することができるかを重視する。よって、目指す児童像を「家族の一員として生活の営みに協力しようとする意欲を高め、習得した知識及び技能を生かして家庭生活で実践できる児童」と捉え、研究を進めていく。その際、家庭科の内容A(3)「家族や地域の人々との関わり」との関連を図ることで、児童は家庭生活が家族と関わりをもちながら成り立っていることや幼児や高齢者など異なる世代の人々との関わりや協力が大切であることに気付き、実践することができるよう、指導を工夫する。児童が学習内容を

実生活と結び付けて考える学習こそが、実生活の中で「学びを生かす」ことにつながるのではないかと考える。

(2) 「生活をよりよくしようと工夫する」について

次期小学校学習指導要領において家庭科の目標として示された「生活をよりよくしようと工夫する資質・能力」は、「生涯にわたって健康で豊かな生活を送るための自立の基礎として必要なもの」と解説されている。これは、生活の中で科学的な根拠を踏まえて自分にとって必要な知識及び技能を選択して生きようとする力と捉えることができる。本研究においては、生活の様々な状況に応じて実践する場面を意図的に設定し、知識及び技能の活用と習得を図る指導を工夫することで、「生活をよりよくしようと工夫する」資質・能力の育成につなげたいと考える。

(3) 「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」の設定について

本研究では、次期学習指導要領に示された「家庭科,技術家庭科(家庭分野)の学習過程の参考例」を基に、実生活との関連を図った問題解決的な学習過程を構築する。児童が日常生活の中から問題を見だし、設定した学習課題を解決する一連の学習過程に、「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」を位置付ける。児童はそれぞれの課題に応じて「計画」→「実践」→「評価・改善」を行うことで、知識及び技能を繰り返し活用し、確実な習得を図ることを目指す。また、「ジャンプ課題」を「家庭での実践」とすることで、実生活の中で学

びを生かすことができるようにする(図1)。

(4) 「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」について

本研究において、習得した知識及び技能を繰り返し活用することを重視する理由は、家庭科の目標に示された資質・能力(「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」)を偏り無く育成することを目指すためである。家庭科の内容A(4)「家族・家庭生活についての課題と実践」との関連を図り、家庭での実践を含めた一連の学習過程を通して生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することを目指す。

まず、児童は「ホップ課題」に取り組む。「ホップ課題」は、児童が主体的に実生活を探る課題である。普段は当たり前のことと捉えていた生活の営みを見つめ直すことで、疑問を見だし、その疑問に対する確かな根拠を探るために「計画」→「実践」→「評価・改善」を行う。この「ホップ課題」の取組によって、児童が既習の知識や生活経験を結び付けて根拠や理由を考えることで、日常生活に必要な知識及び技能の習得を目指す。

次に、児童は「ステップ課題」に取り組む。「ステップ課題」は、児童の実生活で起こり得る状況を想定し、その中で児童が生活を工夫する課題である。児童は想定された状況を自分事として捉え、課題解決に向けて「計画」→「実践」→「評価・改善」を行う。この「ステップ課題」の取組によって、児童が自分や家族にとって必要な選択をしながら、「ホップ課題」で習得した知識及び技能を活用し、日常生活に必要な知識及び技能を習得できるようにする。

最後に、児童は「ジャンプ課題」に取り組む。「ジャンプ課題」は、児童が実生活を工夫する課題である。児童は自分や家族の実生活から課題を設定し、課題解決に向けて「計画」→「実践」→「評価・改善」を行う。この「ジャンプ課題」の取組によって、児童が実生活

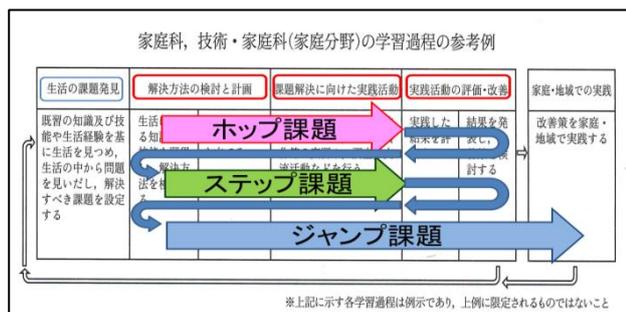


図1 「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」を設定した学習過程

の状況に応じて、自分や家族にとって必要な選択をしながら、「ホップ課題」「ステップ課題」で習得した知識及び技能を広く活用し、習得を深めていくことができるようにする。

このような「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」によって、段階的に課題のレベルを高めながら、児童がそれぞれの課題解決に向けて生活をよりよくしようと工夫することができるようにする（表1）。

表1 「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」における

「知識及び技能」の活用と習得

課題 (実践の場)	活用	習得
実生活を探る 「ホップ課題」 (学校)	既習の 知識及び技能や 生活経験	日常生活に 必要な 知識及び技能
想定された 状況の中で 生活を工夫する 「ステップ課題」 (学校)	「ホップ課題」 で習得した 知識及び技能	
実生活を 工夫する 「ジャンプ課題」 (家庭)	「ホップ課題」 「ステップ課題」 で習得した 知識及び技能	
活用の広がり・習得の深まり		

以上のように、段階的に課題のレベルが高まることをイメージし、「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」と名付けることとした。

(5) 「ポートフォリオ」の導入について

本研究では、一連の学習過程に「ポートフォリオ」を導入する。児童はポートフォリオに「学習内容」や「自分の考え」を記述し、このポートフォリオを家庭に持ち帰り、家族に学習内容を伝える。その際、家族との会話を通して得た「家族の思い」や「家族からのアドバイス」をポートフォリオに記述する。これらはただ蓄積するのではなく、児童自身が学習の中で活用していく。「ポートフォリオ」によって家庭と連携を図りながら学習を進めることで、家族の一員として生活の営みに協力しようとする意欲を高めることができるようにする（図2）。

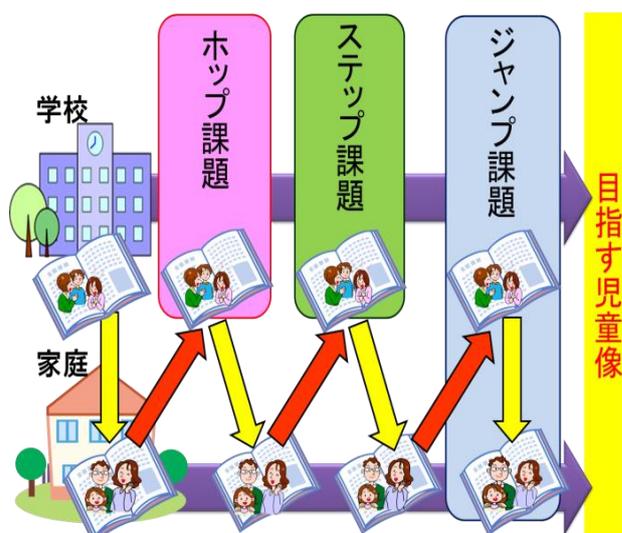


図2 「ポートフォリオ」の導入の仕方

「ポートフォリオ」を導入する目的を以下に2点挙げる。

1つ目は、児童が学習内容について、「ポートフォリオ」を基に家族に相談したり情報収集を行ったりして、家族と学習内容を共有することである。これにより、児童が実生活に関心をもつことができると考える。

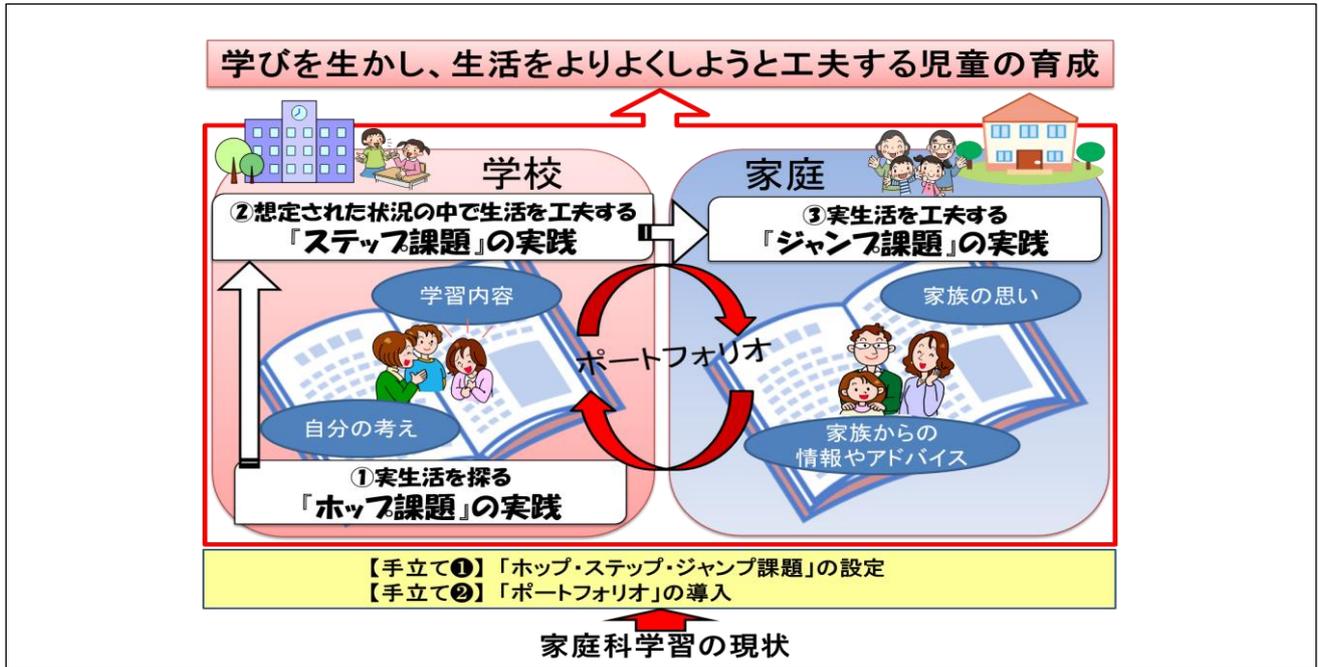
2つ目は、児童が「ポートフォリオ」を活用して、学習内容と自分の実生活の課題を結び付けて考えることである。これにより、児童が家族の一員として課題を解決したり実践したりすることができるように考える。

(6) 「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」の設定と「ポートフォリオ」の導入との関連

本研究主題の「学びを生かし、生活をよりよくしようと工夫する児童の育成」を実現するためには、一連の学習過程を通して、児童が学習内容と自分の実生活の課題を結び付けながら学ぶことが大切であると考えている。

よって、「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」の設定と「ポートフォリオ」の導入を関連付けた指導を行うことで、家庭の理解と協力を得ながら、児童がそれぞれの実生活の課題に応じて学びを生かし、生活をよりよくしようと工夫することができるように考える。

2 研究構想図



V 実践の概要

1 実践計画

(1) 研究題材

本研究では、内容「B 衣食住の生活」の「食生活」の内容で授業実践を行う。

第5学年題材「食べて 元気に」（開隆堂）

第6学年題材「くふうしよう おいしい食事」（開隆堂）

(2) 研究対象

協力校 第5学年・第6学年

授業実践学級 各学年1クラス

(3) 授業実践計画

平成30年10月1日(月)～11月12日(月)

(各12時間×2学年＝全24時間)

日程	第5学年	第6学年
10/1(月)	5年①	6年①
10/3(水)	5年②	6年②
10/5(金)	5年③	6年③
10/10(水)	5年④	6年④
10/12(金)		6年⑤⑥
10/15(月)	5年⑤⑥	6年⑦
10/19(金)	5年⑦	6年⑧
10/22(月)	5年⑧	
10/26(金)	5年⑨	6年⑨⑩
10/29(月)	5年⑩	
10/31(水)	5年⑪	6年⑪
11/12(月)	5年⑫	6年⑫

(4) 検証計画

手立て	検証の観点	検証方法
① 「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」の設定	① 「ホップ課題」 生活の営みを既習の知識や生活経験と結び付け、確かな根拠や理由を理解し、日常生活に必要な知識及び技能の習得を目指すことができたか。	授業の観察 記録ビデオ ・発言 ・発表 ・つぶやき ポートフォリオ
	② 「ステップ課題」 生活課題について「ホップ課題」で習得した知識及び技能を活用し、日常生活に必要な知識及び技能を習得することができたか。	・学習内容 ・自分の考え ・家族の思い ・家族からの情報やアドバイス
	③ 「ジャンプ課題」 実生活の変化する状況や課題に応じて「ホップ課題」「ステップ課題」で習得した知識及び技能を広く活用し、日常生活に必要な知識及び技能の習得を深めるとともに、生活をよりよくしようと工夫することができたか。	・自己評価 ・相互評価 ・他者評価 ・完成作品 ・実践記録カード
② 「ポートフォリオ」の導入	① 家族と学習内容を共有し、実生活に関心をもつことができたか	実態調査 ・アンケート (児童) (保護者)
	② 学習内容と実生活の課題を結び付けて考え、家族の一員として課題を解決したり実践したりすることができたか。	

2 実践

第5学年

題材「食べて 元気に」

題材の目標

日常の食事に関心を持ち、食事の大切さや五大栄養素の種類と働きを理解し、日本の伝統的な日常食である米飯及びみそ汁の調理の仕方を考え、それらをつくり出すことができるようにする。

(1) 題材の構成

学習過程	学習活動
生活の課題発見	【第1時】学習課題を設定する。 ⇒「家族が喜ぶ食事のために自分ができることを増やそう！」そのためにはどんなことを考えればよいのだろうか。
解決方法の検討と学習計画	【第2時】学習課題を解決するための解決方法を検討し、計画を立てる。
実践活動の計画	【第3時】五大栄養素の種類と体内での主な働きを知る。 既習の知識及び技能や生活経験を活用
課題解決に向けた実践活動(学校)	【第4時】「ホップ課題」の計画を立てる。⇒ご飯とみそ汁のつくり方を探る。
	【第5・6・7時】 「ホップ課題」の実践活動を行う。 ⇒グループでご飯を炊く。 ⇒ペアでみそ汁を調理する。
実践活動の評価改善計画	【第8時】「ホップ課題」の実践を振り返る。⇒調理の工夫の仕方を考える。 「ホップ課題」で習得した知識及び技能を活用
課題解決に向けた実践活動(学校)	【第9時】「ステップ課題」の計画を立てる。⇒みそ汁の調理計画を立てる。 【第10時】「ステップ課題」の実践を行う。⇒一人でみそ汁を調理する。
実践活動の評価改善計画	【第11時】「ステップ課題」の実践を振り返り「ジャンプ課題」の計画を立てる。⇒家庭での調理計画を立てる。 「ホップ課題」「ステップ課題」で習得した知識及び技能を活用
課題解決に向けた実践(家庭)	【第12時】「ジャンプ課題」の実践を振り返り、学習課題の解決についてまとめ、今後の生活の実践における新たな課題を見付ける。

第5学年の児童は、これまでの食生活の学習において、ゆでる調理を経験し、食品をゆでることによりかさが減ることやより多くの食品を摂取することができることなどの知識を習得してきた。また、ガスこんろや包丁の使い方などの調理の基礎を学習してきた。これらの児童の実態と本研究主題を踏まえ、本題材で身に付けさせたい資質・能力を

- ① 栄養のバランスのよい食事について理解し、ご飯とみそ汁を調理することができること
- ② おいしいご飯とみそ汁のつくり方を考え、自分なりに調理を工夫することができること
- ③ 栄養を考えた食事のとり方に関心を持ち、調理をしようとする事

として題材の目標を設定し、一連の学習過程を工夫した。これは、児童が生活の中から問題を見いだして課題を設定し、課題解決に向けて実践する問題解決的な学習を基本とする。学習のまとめと振り返りから見付けた新たな課題が継続的な家庭実践につながることを期待する。このような一連の学習過程を通して、児童が知識及び技能を繰り返し活用し、主体的に家族に関わりながら実践を重ねることができるように題材を構成した。授業実践においては、1単位時間の学習における児童の思考をつなぐ指導計画(別添資料1参照)を考え、全時間の学習指導案を作成した。また、自ら調理することで実践する喜びや楽しさや相手に感謝される喜びを感じることができるように指導を工夫した。実際の指導にあたっては、前時の児童の実態を踏まえながら指導の改善を図り、学習を進めた。

(2) 結果と考察

一連の学習過程を通じた実践研究であるため、全時間の実践結果について考察する。

【第1時】においては、児童が事前にインタビューした家族の思い(児童が大人になったときにどんな食生活を送れるようになってほしいか)を基に、自分の思い(できるようになりたいこと)とその理由を考えた。それらを

友達と紹介し合い、クラス全員で本題材の学習課題「家族が喜ぶ食事のために、自分ができることを増やそう」を導いた（図3）。



図3 家族の思いと自分の思いから導かれた学習課題

児童は事前に家族の思いを知ったことで、必要感をもって家族との生活をよりよくしようと考え、「自分ができることを増やしたい。」という思いをもつことができたと考える。また、児童一人一人の思いを学習課題として集約したことで、児童が学習課題を自分事として捉え、学習する準備を整えることができたと考える。

第2時においては、「手軽に飲食できる便利な現代社会で、調理することは必要なのか。」と児童に問い掛けた。児童は自分の食生活を振り返り、「外食だと好きな物ばかり食べてしまう。」「外食が多ければお金がかかる。」「調理できないと、子供を育てるときに困る。」などの問題点を見だし、「栄養」「健康」「金銭」「愛情」「協力」といった多様な視点から調理することのよさに気付くことができた。

このように、本題材を学習する意義を児童が理解した上で、学習計画（表2）を知らせると、児童から「だんだん自分で調理できるようになる計画だ。」

表2 学習計画（第5学年）

時間	「食べて 元気に」の学習計画
1	学習課題を設定する
2	調理することについて考える
3	五大栄養素とはたらきを学ぶ
4	ご飯とみそ汁のつくり方を調べる
5・6	ご飯をたく（グループ）
7	みそ汁をつくる（ペア）
8	調理の工夫のしかたを考える
9	みそ汁の調理計画を立てる（自分）
10	みそ汁をつくる（自分）
11	家庭での調理計画を立てる（自分）
家庭	家族の一員として調理する（自分）
12	学習課題のふり返りと学習のまとめ

「自分で調理するのは緊張するけど、面白そう。」との声が上がった。児童は本題材を学習する意義と学習計画を結び付け、学習に見通しをもつことができたと考える。

第3時においては、本題材の学習で活用していく知識となる五大栄養素の種類と体内での主な働きについて取り上げた。学習内容が「炭水化物や脂質はエネルギーになる」という抽象的な理解に留まることなく、栄養素をより具体的な事象と結び付けて理解することができるよう、栄養士とのTTを取り入れた（図4）。



図4 栄養士とのTTの様子

栄養士は「寝ている間でもずっと心臓を動かし続けるためにエネルギーは使われている。」など、児童の発達段階や生活経験に沿って栄養素の働きを具体的に説明し、栄養のバランスが大切であることを児童に伝えた。さらに、ある日の朝食として「ご飯・じゃがいものみそ汁・スクランブルエッグ」の献立を示すと、多くの児童が「無機質」と「ビタミン」の不足に気付くことができた。「自分ならみそ汁にわかめとしいたけを加える。」など、自分なりの考えをもつことができたことから、栄養のバランスの良い食事をとることの大切さを理解することができたと考える。

① 実生活を探る「ホップ課題」

第4時においては、「ご飯とみそ汁」の調理実習に向けた調理計画を立てた。その際、単に「ご飯とみそ汁」の調理手順を示すだけでなく、児童から「なぜそうするのだろう。」と思う疑問を引き出した（表3）。

表3 児童の疑問例

- なぜ、吸水させるのか。
- なぜ、強火⇒中火⇒弱火に火力を調節するのか。
- なぜ、蒸らすのか。
- なぜ、にぼしの頭とはらわたを取るのか。
- なぜ、火の通りにくい実から入れるのか。
- なぜ、みそを最後に入れるのか。

児童は、一つ一つの疑問について既習の知識及び技能や自分の生活経験を結び付けて考え、友達と意見交流を行った（表4）。

表4 児童のやり取りの一部

児童A:なんでにぼしの頭とはらわたを取るのかな。
 児童B:かたいからじゃない？
 児童C:おいしくないからだと思う。
 児童D:前におばあちゃんがはらわたは苦いって言った。
 児童A:そうか。確かに秋刀魚のはらわたも食べたら苦かった。だから取った方がいいんだね。

意見交流後に、「家族にも聞いてみよう。」という児童のつぶやきもあり、主体的に家族に関わろうとする児童の姿が見られた。児童は、「ポートフォリオ」を基に、家族から「ご飯とみそ汁」の調理に関する情報やアドバイスをもらうことで、疑問に対する根拠を明確にすることができた（表5）。

表5 家族からの情報やアドバイス例（「ホップ課題」）

みそを入れてから長い時間加熱し続けると、みその風味が失われてしまうから気を付けてね。（母より）

ここでは、児童が単に調理手順を覚えるのではなく、その根拠を考えたり家族からの情報やアドバイスを生かしたりすることで調理手順についての知識を深め、学ぶ楽しさを感じることができたと考えられる。

第5時・第6時においては、炊飯実習を行った。最初の「ホップ課題」は、調理に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を習得することを目指し、教師がICT機器を活用して計量を実演した後（図5）、全児童が米や水の計量を体験できるようにした（図6）。



図5 計量の実演



図6 計量の体験

炊飯の実習はグループ活動としたことで、吸水時間を活用して前時の意見交流の続きを行ったり、調理段階ごとに米の変化を観察して気付いたことを交流したりした（図7・図8）。



図7 吸水した米の観察



図8 炊き上がりの確認

児童は「ホップ課題」において、家族からの情報やアドバイスを生かしたり、友達と協働して炊飯やみそ汁を調理する実践を行ったりしたことで、調理の基礎的・基本的な知識及び技能（計量や火加減の調節、だしの取り方や材料の切り方など）を実践的・体験的に学ぶことができた。「ホップ課題」は初めての実践であり、ご飯が焦げてしまうことも予想された。火加減調節の難しさを経験した児童が、その経験を基に自分なりに改善策を考えたり、家族から新たに情報やアドバイスをもらったりすることができた。このことは、課題解決に向けた児童の主体的な姿勢であると捉えることができる。

第7時においては、「みそ汁」の調理実習を行った。ペアで調理したことで、児童一人一人がより多くの調理工程に携わること



図9 みそ汁の調理の様子

ができた（図9）。炊飯実習と同様、児童はみそ汁の調理の仕方を根拠とともに理解していたが、実践では児童の思い通りに調理できないこともあると予想された。汁が蒸発してしまった経験をした児童は、実践後に「どうすればよかったのか。」と自分なりに改善策を考えたり、家族から新たに情報やアドバイスをもらったりする様子から、次の実践に向けて意欲を高めていることが分かった（表6・表7）。

表6 「ホップ課題」を終えた児童の感想<一部抜粋>

- ・炊飯は火加減が大切だと分かりました。上手に調節できるようにになりたいです。
- ・みそ汁をつくったら、だしのおいしさが分かりました。
- ・材料を切っている間にみそ汁の水が蒸発してしまうので、今度は蒸発分の水の量をもっと増やしたいです。

表7 家族からの情報やアドバイス例（「ホップ課題」）

大根などのかたい食材は、薄く切ると早く火が通るよ。
次は手際よくできるように頑張ってるね。（母より）

「ホップ課題」では、学習内容と既習の知識及び技能やこれまでの生活経験を結び付けて考えたことで、調理に関する基礎的・基本的な知識及び技能の習得を目指すことができたと考えられる。

第8時においては、みそ汁を調理をするときに工夫することについて考えた。児童は「ホップ課題」の実践を踏まえて、「調理方法、材料の切り方、味の付け方、火加減、栄養のバランス、盛り付け方、食べる人の好み」などの調理を工夫する視点に気付くことができた。また、具体的な状況や健康状態を設定した家族のためにみそ汁をつくとしたら、どのように調理を工夫するかについて考えた。例えば、「野菜嫌いな弟（幼児）」のために、「野菜を細かくみじん切りにする。」などの「材料の切り方」や、「かたいものが食べづらいおばあちゃん（高齢者）」のために、「大根を長い時間煮てやわらかくする。」などの「調理方法」を考えることができた。また、「塩分の取り過ぎに気を付けているお父さん」のために、「みそを入れる分量を2/3にする。」などの「味の付け方」に着目した児童もいた。

児童は食べる人それぞれの状況や健康状態に応じて調理を工夫する内容を考えることができ、調理を工夫することのよさを理解することができたと考えられる（図10）。

○あなたは家族の一員としてみそ汁を調理します。 ①～④の家族のために、あなただったらどのように調理を工夫しますか？		調理方法
調理名 大根・ねぎ・油あげのみそ汁		材料の切り方
① かたいものが食べづらいおばあちゃん 大根を長い時間にて、やわらかくする。 大根を薄く切ると早く火が通る。 大根をとうふなどのうがいに交えてあげる。		材料
② 野菜が嫌いのお弟 野菜を細かく切ると、みそ汁の中に入れてあげる。		調理方法
③ 塩分の取り過ぎに気を付けているお父さん 味付けを少しづつにする。 (みそを入れる分量を2/3にする。)		味の付け方
④ ダイエット中のお母さん 野菜を多めにする。 たんぱく質なども		栄養のバランス

図10 第8時のワークシートの記述例

② 想定された状況の中で生活を工夫する 「ステップ課題」

第9時においては、家族の一員として一人でみそ汁を調理する「ステップ課題」の実践に向けて調理計画を考えた。「ステップ課題」は、児童の実生活の中で起こり得る状況を想定した課題を作成した（表8）。

表8 第5学年の「ステップ課題」

仕事で帰りが遅くなっても、家族はいつもおいしい食事を用意してくれます。仕事と家事をこなし、毎日とてもつかれているはず。そんな家族のために、「何か自分ができることがあれば・・・」と考え、「今日は自分がみそ汁をつくるよ。」と家族に提案しました。家族は、「ご飯とからあげをつくってくれます。みそ汁で使える材料は、**大根・ねぎ・小松菜・しいたけ・油あげ・豆腐・カットわかめ**です。**にぼしとみそ**もあります。今日は習い事があるので、帰宅後、**18時から**つくり始める予定です。**18時20分**には家族全員がそろいます。あなただったら、家族の一員としてどんなみそ汁をつくりますか。

「ステップ課題」の作成に当たって工夫したことは、①「普段は家族が食事を用意してくれる。」「家族は毎日仕事と家事をこなしている。」などの児童の実態や生活経験から理解しやすい家庭状況を想定したことや、②「家族のために自分でできることをしたい。」という児童の思いが原動力となるように家族のためにみそ汁をつくることを課題としたことである。

また、「ステップ課題」は、想定された状況ではあるものの、「ホップ課題」で習得した知識及び技能を生活の中で活用することをねらっている。そこで、③これまでの調理実習で使ったことのある材料を提示したり、④1食分の栄養のバランスに着目できるようご飯とからあげは家族がつくってくれるという状況を想定したりした。

さらに、⑤家族の生活に合わせて手際よく調理することができるよう、20分間で調理するという状況を想定した。

児童は、前時で学習した「調理を工夫する視点」を基に、家族の状況や健康状態に応じて調理計画を考えた（図11）。

自分の考え		なぜそうするのか(理由)	
みそ汁 油あげとわかめとだいこんとねぎの汁		この食材は、たんぱく質、無機質、ビタミンが豊富で、栄養のバランスが良い	
材料(栄養素: 炭水化物、たんぱく質、脂質、ビタミン、ミネラル) わかめ、カットわかめ、油あげ、ねぎ、みそ		具だくさんで、いぼしも、わかめをいぼしにするから。	
①にぼしのだしをとる。 ②具材をすばやく切る 大根は、いぼしのかたうすく 油あげを、たんで切りにする わかめは、カットされているのでそのまま ③大根を最初に投入し、最後にわかめ、ねぎ、みそを入れる。		①の理由... 最初にいぼしのだしをとることで、具材に味がしみこみやすくなる。(あつた) ②大根は厚いと、にぼしのかたうすくは、食べやすいから(ローサイア)で、最初に大根を入れたい。かたうすくは、わかめなどのやわらかいものを、最後に入れないと、かたうすくが、火に当たらないように。	
安全語・正しい生活・環境面で			
④みそを入れるタイミング②材料の切り方③材料を入れる順番			
おもちにエネルギーのもとになる食品		おもちに体をつくるもとになる食品	
おもちに体の調子を整えるもとになる食品			
主食	穀類	野菜	
しる物	みそ汁	油あげ	わかめ
おかず	香辛料	片くし	油
多くみくまわれる栄養素	炭水化物	脂質	たんぱく質
			無機質(カルシウムなど)
			ビタミン・無機質
自由メモちゃん おかあさんがイベントしているから、ビタミン(野菜)を2品使うと、ようこんじも、らえるし、おいしいし、ビタミン以外のものも、入れて調理したいです。			

図11 「ステップ課題」調理計画例

家族の状況

みそ汁に用いる材料の選択については、「栄養のバランス」を考えて計画を立てた児童が多く、既習の知識を活用したり、家族への思いを大切にしたりすることができた児童の様子が明らかとなった。その際、20分間で調理する状況に着目し、「使う材料が多すぎると時間がかかる。」と、品数に配慮する様子も見られた。さらに、「ホップ課題」の際に家族から得た情報やアドバイスを生かして計画を立てる児童の様子も見られたことから、学習内容を実生活と結び付けて考えることができたことが分かった(図12)。

大根などのかたい食材は、**うすく切る**と早く火が通るよ。次は手際よくできるように頑張るね。(母より)

大根は、いぼしのかた**うすく**。大根は厚いと、にぼしのかたうすくは、食べやすいから(ローサイア)で、最初に大根を入れたい。かたうすくは、わかめなどのやわらかいものを、最後に入れないと、かたうすくが、火に当たらないように。

図12 「ホップ課題」の家族からの情報やアドバイスを生かした記述内容(図11より一部抜粋)

第10時においては、自分で考えた調理計画を基に、一人でみそ汁の調理を行った。調理前は緊張した面持ちで調理に臨んだが、「ポートフォリオ」に記述したこれまでの学習内容を確認したり、同じ調理台を使う友達から

アドバイスをもらったりしたことで、安心して調理することができた。(図13・図14)。



図13 課題内容の確認

図14 みそ汁の一人調理

全児童が一人でみそ汁を完成させ、調理したみそ汁を友達に試食してもらうことでお互いの成果を認め合うことができた。児童はこれまでの実践の積み重ねによって、習得した知識及び技能を活用して自分の力でみそ汁を調理することができるようになった。「ステップ課題」の実践後の児童の感想からも「自分でできた」という達成感が自信につながったことが分かった(図15)。

学習の感想

ちょっと口がこがたけど、**大根の厚さ**がちょうどよかったので、よかったです。家でつくる時もがんばりたいです。

- 一人でもとてもおいしいみそ汁ができたので、家でつくることに自信がわいてきました。

図15 「ステップ課題」を終えた児童の感想<一部抜粋>

また、児童が実践の様子を家族に伝えて新たに家族の思いと、情報やアドバイスを得たことで、「ジャンプ課題」に向けて意欲を高めることができたと考える(表9)。

表9 家族の思いの例(「ステップ課題」)

おいしいみそ汁ができたみたいだね。そのみそ汁をお家でもつくって、家族みんなに食べさせてほしいな。(父より)

③ 実生活を工夫する「ジャンプ課題」

第11時においては、第1時における自分の思いを振り返り、できるようになったことを生かして家庭で実践する調理計画を立てた。計画には、家族を喜ばせたいという家族への思いが表出し(図16)、これまでの学習で習得した知識及び技能を活用し、調理に使う食品や調理方法などを自分の家族の状況や健康状態に応じて考えることができた。

粉のたしは一瞬でとけてたしが取れるのでお母さんはこれで時間を短くして作っている人だと思った。家族みんながおいしいと言ってくれてうれしかった。みそ汁を作るのは楽しかった。

- ・調理してみてもまだすべてが自分でできなくてお母さんに手伝ってもらったところもあったけど、豆ふを包丁を使って運ぶといいなどが分かってよかったです。
- ・学校でつくったときは、みその量が多すぎてしょっぱかったけど、家で作ったときはちょうどよい味で家族が喜んでくれました。また今度は違う具材で調理しようと思いました。
- ・学校での調理よりうまく早くできたのでよかったです。

図 21 「ジャンプ課題」を終えた児童の感想（一部抜粋）

第 12 時においては、友達と実践報告会を行った。この報告会は発表者一人につき二人の児童が聞く形態としたことで、リラックスした雰囲気をつくることができた。児童同士の自然な対話を通してお互いの実践を認め合うことができたと考える（表 10・図 22）。

表 10 実践報告会時の児童のやり取りの一部（★は紹介者）

児童 G：だしは何で取ったのですか？	
児童 H★：かつおぶしです。	
児童 I：〇〇くん（H の弟）も飲めましたか？	
児童 H★：はい、飲めました。	グループ①
児童 I：よかったね。	
児童 J：なんでこれらの材料を選んだのですか。	
児童 K★：栄養をしっかりととれるようにするためです。	
児童 L：家族の誰を思ってつくったのですか？一番は？	
児童 K★：え～一番？うーん・・・	
家族全員です!!	グループ②
児童 L：さすがだね。	

また、題材の学習のまとめにおける児童の記述から、家族のために調理する喜びを味わうことができた様子を伺うことができ、一連の学習が今後のよりよい食生活に向けた新たな課題につながられたことが分かった。（表 11）。

表 11 児童のまとめ（一部抜粋）

- ・家で作って家族に「ありがとう」と言われたので、とてもうれしかったです。
- ・初めは、ご飯やみそ汁はむずかしいんじゃないかなと調理の仕方がわからなかったけど、今ではつくれるようになったので、これからは家族の手伝いができると思いました。
- ・だしの取り方、実の切り方、栄養のバランスなど、調理で工夫することがたくさんありました。家族の大変さを減らすためにご飯とみそ汁がつくれるようになってよかったです。



図 22 実践報告会の様子

(3) 第 5 学年から第 6 学年へのつながり

第 6 学年では、第 5 学年の食生活の学習を発展的に扱う、題材「くふうしよう おいしい食事」で授業実践を行った（別添資料 2 参照）。第 6 学年の児童は、これまでに、調理の基礎に加え、ゆでたりいためたりする調理に関する学習をしてきている。

題材の目標

日常の食事に関心を持ち、栄養を考えた 1 食分の献立の立て方や調理の特性を理解し、材料や目的に応じた調理の仕方を考え、調理計画を立て、おかずや 1 食分の食事をつくることができるようにする。

第 6 学年の「ホップ課題」では、「粉ふきいも」と「ジャーマンポテト」の調理手順から児童の疑問を引き出した（表 12）。

表 12 第 6 学年の「ホップ課題」における児童の疑問例

- ・なぜ、皮をむいたじゃがいもを水につけておくのか。
- ・なぜ、再びなべに戻して弱火かけるのか。
- ・なぜ粉チーズを加えた後、1 分くらい蒸らすのか。

第 5 学年に比べ、「材料の切り方」や「ゆで方・炒め方」などの調理の基礎に関わる疑問より初めて知ったことや経験していないことへの疑問が多かった。これは、第 5 学年からの家庭科の学習や経験を通して調理に関する知識及び技能の習得を深めてきたため、新たな課題に着目することができたと考えられる。

第 6 学年の「ステップ課題」では、第 5 学年の課題を基に、使える食品数や調理時間を増やして作成し、提示した（表 13）。

表 13 第 6 学年の「ステップ課題」

仕事で帰りが遅くなっても、家族はいつもおいしい食事を用意してくれます。仕事と家事をこなし、毎日とてもつかれているはず。そんな家族のために、「何か自分ができることがあれば・・・」と考え、「今日は自分がおかずをつくるよ。」と家族に提案しました。家族は、**ご飯と大根とわかめのみそ汁**をつくってくれます。おかずで使える材料は、**じゃがいも・卵・ベーコン・小松菜・たまねぎ・にんじん・キャベツ・ごま**です。調味料は、**油・塩・こしょう・しょうゆ・酢**があります。今日は習い事があるので、帰宅後、**18時から**つくり始める予定です。**18時30分**には家族全員がそろいます。あなただったら、家族の一員としてどんなおかずをつくりませんか。

児童は、既習の調理（粉ふきいも・ジャー

マンポテト・野菜いため・スクランブルエッグ・ベーコン巻きなど)を工夫し、おかずの調理計画を立てた。時間内に2品のおかずを調理する計画を立てた児童が多かったことは、これまでの学習や経験によって、「時間配分」を考えることができるようになったためであると考えられる。また、「栄養のバランス」「材料の切り方」「ゆで加減・いため加減」「味の付け方」「盛り付け方」などを単独の視点で考えるのではなく、複数の視点を結び付けて調理の工夫を具体的に考えた児童が多かった。これは、児童がこれまでの学習や経験によって知識及び技能を広く活用して調理の仕方の根拠をより明確にすることができるようになったためであると考えられる(表14・図23)。

表14 第6学年の「ステップ課題」に見られた調理の仕方の根拠(なぜそうするのか)

- ・お肉の食感を楽しめるように、ベーコンは4cmの短冊切りにする。
- ・お母さんの好きな野菜いためをつくりたいけど、自分はキャベツが苦手だから、こがすくらいによくいためて濃い目に味付けをする。
- ・おいしそうに見えるように野菜いためを山のように盛りつけて、食べたときにごまの風味を楽しめるように、てっぺんにごまをかける。



図23 「ステップ課題」の一人調理の様子

第6学年の「ジャンプ課題」では、第5学年と同様、家族のための調理の仕方を具体的に考え、家庭で調理する実践を行った(図24)。

第5学年では、全児童が「ステップ課題」で調理した「みそ汁」の材料を変えて「みそ汁」を調理したが、第6学年では、約70%の児童が「ステップ課題」で調理した「おかず」の材料と調理法を変え、別の「おかず」を調理した。これは、単に調理したいという気持ちにだけでなく、家族の一員として、家族の状況や健康状態に加え、家族の思いを大切に

しながら、自分で調理を工夫しようとする態度の表れであると考えられる。



図24 第6学年の「ジャンプ課題」実践報告書(一部抜粋)

第6学年の実践報告会では、既習の知識及び技能を友達の実践と結び付けて考え、調理の具体的な方法について質問する児童が多かった(表15)。このことも、経験していないことへの関心が高まり、新しい知識を習得しようとする姿であると捉えることができる。

表15 実践報告会時の児童のやり取りの一部(★は紹介者)

- 児童M: なんで、にんじんを細長く切ったのですか?
 いちょう切りでもよかったと思いますが?
 児童N★: 細長い方が、火が通りやすいと思ったからです。
 児童O: じゃがいもは、どうやってつぶしたのですか?
 児童N★: つぶすための道具があって、こうやって(ジェスチャー)つぶしました。

第6学年の「ポートフォリオ」の活用については、第5学年に比べ、題材の導入時から学習内容を家族に伝えていた児童が多く、積極的に家族からの情報やアドバイスを得ていた。これは、学習が家庭生活と大きく関わっていることや、家族の一員として生活に関わることの大切さを児童が理解していたためであると考えられる。

第6学年と第5学年で共通していることは、「ポートフォリオ」を導入した学習が進むにつれ、主体的に家族と会話し、家族から情報やアドバイスを得ることができた児童が増えたことである。これは、一連の学習過程を通して、「ポートフォリオ」を基に、学習内容と実生活を結び付けることに必要感を見いだす児童が増えたためであると考えられる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 授業実践（第5・6学年）より

【手立て①】の変容

本研究では、一連の学習過程に「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」を位置付けて題材を構成し、指導を工夫した。児童は「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」のそれぞれの課題解決に向けて自分の考えをもち、考えを友達と交流したり、実践したりする実践的・体験的な活動を重ねることができた。

「ホップ課題」では、児童の実生活を探る課題を設定したことで、児童は課題解決に向けて、生活の営みを既習の知識や生活経験と結び付けて考え、確かな根拠や理由を理解し、日常生活に必要な知識及び技能の習得を目指すことができた。

「ステップ課題」では、想定された状況の中で生活を工夫する課題を設定したことで、児童は課題解決に向けて、「ホップ課題」で習得した知識及び技能を活用し、日常生活に必要な知識及び技能を習得することができた。

「ジャンプ課題」では、実生活を工夫する課題を設定したことで、家族の状況や健康状態に応じて、「ホップ課題」「ステップ課題」で習得した知識及び技能を広く活用し、習得を深めるとともに、家庭において生活をよりよくしようと工夫することができた。

題材の学習を終えた児童のまとめ（図 25）から、家族との生活の中で実践できたことを、家族に褒められたり認められたりしたことで実践する喜びや達成感を味わったことが分かった。また、これらが次の実践に主体的に取り組むための新たな課題（図 26）につながったことが分かった。

このように、一連の学習過程を通して、知識及び技能を繰り返し活用し、課題を解決する学習を家庭につなぐことができたことから、【手立て①】は有効であったと考える。

最初はむずかしそうに思っていたけれど授業で勉強をしていくうちにだんだんできる気がかしてきて、計画を立てている時は、どうすれば喜んでくれるかなと考へたので、家でつづけるのからとて楽しんでました。家でつづけて家族に、おつかいと言われたのでうれしかったです。

↑第5学年児童

家族の一員として食事を作る、自分の工夫できることを習得するという目標を達成し、ホップ・ステップ・ジャンプ課題として、おいしく食べ、おための調理、盛り付け、などの工夫を知り、同時に調理もでき、これからに生かせることを学べたと思いきや、授業でやった工夫、家族に褒められたり、おつかいと言われたり、嬉しかったので、上手にしたいです。

図 25 児童のまとめ（一部抜粋）

↑第6学年児童

○家族の一員として、さらによりよい生活にするためのあなたの「次の課題」は何ですか？
次の課題
ごはんみそ汁の他に、おかずも作れるようになりたいです。みそ汁も今よりも工夫して作れるようになりたいです。（第5学年児童）

○家族の一員として、さらによりよい生活にするためのあなたの「次の課題」は何ですか？
次の課題
母といっしょに米料理を作れようと思った。（第6学年児童）

○家族の一員として、さらによりよい生活にするためのあなたの「次の課題」は何ですか？
次の課題
米料理以外のことも自分でやりたいと思いました。（第5学年児童）

図 26 児童の新たな課題（一部抜粋）

【手立て②】の変容

本研究では、一連の学習過程を通して「ポートフォリオ」を導入した。児童は「ポートフォリオ」を基に収集した「家族の思い」や「家族からの情報やアドバイス」を学習に生かすことができた。それらの内容を記述例として以下に示す（表 16）。

表 16 第5学年の「ポートフォリオ」の記述例

家族の思い（例）	家族からの情報やアドバイス（例）
<ul style="list-style-type: none"> ・栄養のバランスのよい食事を一人で作れるようになってほしい。 ・旬のものを取り入れ、工夫しながら調理し、おいしく食事をとれる人になってほしい。 ・しっかり学習して、将来お母さんになったときに役立ててね。 ・今まで学んだことを生かしておいしいみそ汁をつくってね。 ・みそ汁は食卓に欠かせないので、つくれるようになってくれたらとてもうれしいです。 ・友達から「だしがよくでているね。」とほめられたそうですね。今日つくった「やわらかみそ汁」をぜひお家でもつくってね。 ・野菜の切り方が前に練習したときよりずっと上手になっていておどろきました。がんばって完成させたみそ汁、とってもおいしかったです。またつくってね。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お米は煮早く洗おうね。 ・お米を炊くときは水の量に注意してね。 ・みそを入れてすぐに火を消さないと、みそのうま味や香りがとんじやうよ。 ・みそ汁のだしはよく取るとおいしくなるよ。 ・にぼしは、だしを取った後に食べたこともあったよ。 ・みそ汁の実は、根菜⇒葉物⇒ねぎの順に入れよう。 ・だしがうすかったようなので、考えてつくってみよう。例えば野菜でだしを取るとかね。 ・具材は同じ大きさに切らないと火の通り方がちがうから注意してね。 ・「ステップ課題」の調理は、イメージトレーニングをして、落ち着いてつくってね。 ・時間がないときは、実を小さく切ったり、うすく切ったり、火の通りが早くなるように工夫するのいいと思います。

題材の導入時において、児童に「ポートフォリオ」を導入する目的について話した。「家族からの情報やアドバイス」欄は、児童や家族が記述し、学習の中で活用することが大切であることを意識付けた。学習の導入時は、なかなか家族と意識的に会話をすることができなかった児童が多かったが、「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」と学習が進むにつれて家族に学習内容を伝えることができるようになった児童が増えていった。これは、自分の家族にも学習内容を伝えたい、家族の思いや考えを知りたい、家族のために自分ができることをしたいと思うようになったためであると考えられる。このことから、「ポートフォリオ」の導入により、児童が主体となって学習内容を家庭と共有し、実生活への関心を高めることができたと考える。

また、児童は「家族の思い」や「家族からの情報やアドバイス」を学習に生かすだけでなく、学習したことを実生活に生かすこともできた。これは、児童が「ポートフォリオ」を活用することで、常に学習と実生活を一体として捉え、学習内容と実生活の課題を結び付けて考えることができたためであると考えられる。児童が習得した知識及び技能を単なる理解に留めず、家族との実生活の様々な課題に応じて活用できる、「使える知識及び技能」となったと言える。特に、「ジャンプ課題」においては、これまでに習得した知識及び技能に自信をもち、家族のために自分ができることをしたい、家族に協力したいという思いをもって実践することができた。このことから、「ポートフォリオ」の導入により、児童が家族の一員として課題を解決したり実践したりすることができたと考える。

このような家族と実生活を意識した学習の中で、児童が家族の一員として生活の営みに協力しようとする意欲を高めることができたことから、【手立て②】は有効であったと考える。

(2) アンケート結果（第5・6学年）より 【児童アンケート】

授業実践の前後で児童アンケートを行った（図27）。「青菜のおひたし」の調理について、教科書記載の調理の仕方と異なる方法を提案した友達に対する回答を比較すると、調理の仕方の根拠とともに自分の考えを述べた児童の割合が12%増加した。

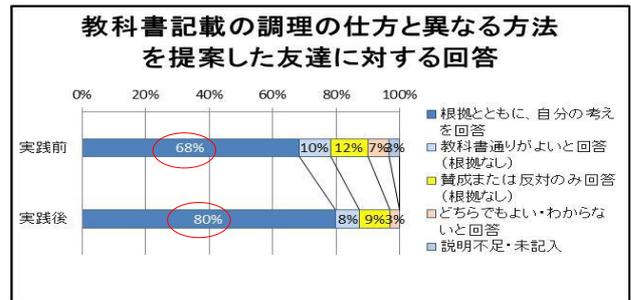
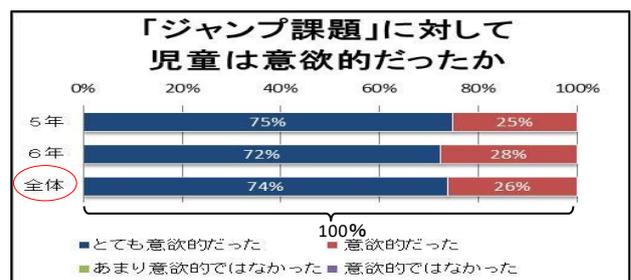


図27 児童アンケート結果

この結果から、児童が習得した知識及び技能を生かして思考できるようになったと捉えることができる。

【保護者アンケート】

授業実践後に、保護者アンケートを行った（図28）。「ジャンプ課題」に対する児童の取組の様子は、第5・6学年の全児童（100%）が意欲的であったことが分かった。また、89%の家庭において児童と家族の会話が増え、99%の保護者が「家族からの情報やアドバイス」は役に立っていたと思うと答えた。このことから、学習に対して家庭の理解と協力を得ることができたと考える。さらに、「調理に積極的に関わってくれるようになった。」「以前よりも調理に興味が出てきた。」などの記述からも、児童の成長や調理に協力しようとする意欲が高まったと考えられる。



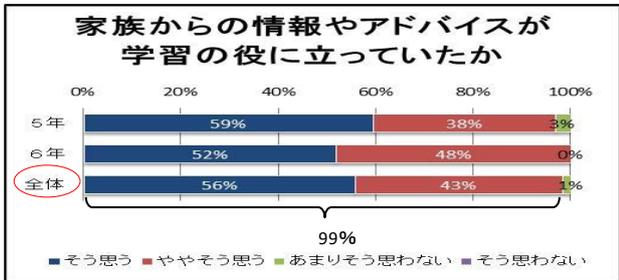
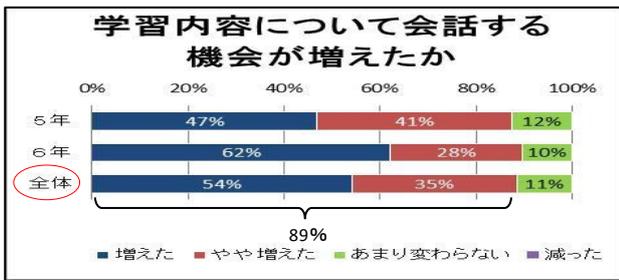


図 28 保護者アンケートの結果

(3) 継続的な実践 (第 5・6 学年) より

学習終了後の家庭での実践については、「実践記録カード」に記録するよう伝えた。児童の主体的かつ継続的な家庭実践を認めることができるものである (図 29)。

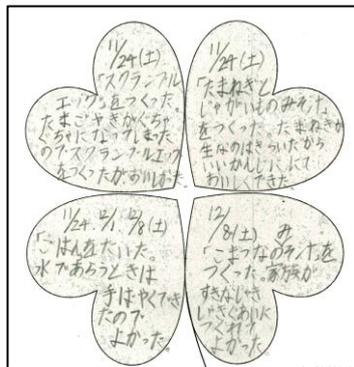


図 29 実践記録カード記述例

本研究においては、学習終了後 1 ヶ月間における食生活に関わる家庭実践の状況を把握した (図 30)。

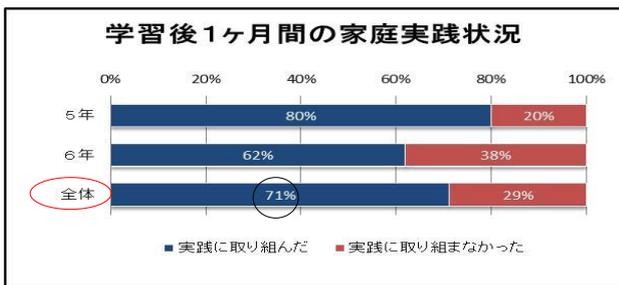


図 30 継続的な家庭実践の状況

第 5・6 学年全体の約 70% の児童が主体的に家庭で実践していたことから、本研究の手立てによって、学習を家庭につなぎ、生活をよりよくしようと工夫する継続的な実践へとつながったと考えられる。

(4) 研究を通して

(1)～(3)の成果を総合的に考察すると、本

研究において児童は「知識及び技能」を繰り返し活用したことで「思考力・判断力・表現力等」を身に付け、習得した知識及び技能に自信をもち、家庭での実践につなげることができたと捉えることができる。また、この自信が原動力となり、「またやってみよう」「家族の役に立ちたい。」と、家族の一員として家庭で実践する意欲を高めることができたことと捉えることができる。この意欲は、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養につながるものであろう。社会や生活がどう変化しようとも、「使える知識及び技能」が十分に機能することで、自分にとって必要な選択をして生きる力になると確信する。

以上のことから、家庭科学習における「ホップ・ステップ・ジャンプ課題」の設定と「ポートフォリオ」の導入は、「学びを生かし、生活をよりよくしようと工夫する児童の育成」の実現に有効であったと考える。

2 今後の課題

本研究の成果を更に高めていくためには、実践活動を設定した一単位時間の進め方と時数調整を含めた題材構成の工夫及び学校の特色や児童の実態に応じた年間指導計画の見直しが必要であると考えられる。また、今後は「ポートフォリオ」の導入の有無に関わらず、児童が家庭科の学びを生活に生かそうとする意欲を高め、主体的に家族とコミュニケーションを図りながら学習を進めるための更なる指導の工夫が必要であると考えられる。

<参考文献>

- ・文部科学省：『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 家庭科編』，東洋館出版社，2018。
- ・田村学：『深い学び』，東洋館出版社，2018。
- ・岡洋子 鈴木明子：『小学校教育課程実践講座家庭』，ぎょうせい，2017。
- ・田村知子 村川雅弘 吉富芳正 西岡加名恵：『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』，ぎょうせい，2018。
- ・西岡加名恵 石井英真 田中耕治：『新しい教育評価入門・人を育てる評価のために』，有斐閣，2016。
- ・山口美紀 岡陽子：『生徒の主体的な問題解決能力を育む技術・家庭科の題材構成と授業に関する考察～パフォーマンス評価及びポートフォリオ評価による授業分析』，佐賀大学，2016。
- ・貴志倫子ほか：『基礎的・基本的な知識や技能の確かな習得をめざす家庭・技術・家庭科学習指導～問題解決的な学習におけるパフォーマンス評価を通して～』，福岡市教育センター，2016。